

# 2024年度 教員おすすめの本



サカナをクリックすると  
図書のかわしい画面が  
開きます。

# 人文学部

## 渡部 智也先生



### そして誰もいなくなった アガサ・クリスティー著；青木久恵訳

最近の学生さんと接していて痛感することがあります。それは、「皆さんこちらが想定している以上に本を読んでいない！」ということ(勿論例外はあります)。これは、特にインターネットとスマートフォンの発達により、娯楽が多様化したことと無縁ではないでしょう。しかしながら、世の中には「これを読んでいないなんて、人生の損失だ！」と思えるような本が確かにあります。大学生のうちに、出来るだけ多くそのような本に触れておいて欲しいと思っています。前置きが長くなりましたが、そのような観点から強くお勧めしたいのが、このアガサ・クリスティーの『そして誰もいなくなった』です。おそらく誰もがタイトルくらいは聞いたことがあるでしょう。孤島に招かれた、互いに面識のない男女十名が、童謡(数え唄)になぞらえて次々に殺されていく物語です。「あれ、なんかそういう話を見たことがあるような」と思った方は

鋭いです。なぜなら、クリスティーのこの作品の後ろには無数のオマージュやパスティッシュが続いている、つまり、このクリスティーの作品をベースに、様々な模倣作品が生み出されているからです。その形も小説、漫画、アニメ、ドラマ、映画、ゲーム、と多種多様で、その影響の幅広さは底知れません。それら全ての作品の原点とも言える、この『そして誰もいなくなった』を読んでおくことで、世の中に氾濫する本作の亜種に触れたとき、自然とその面白さを十二分に味わうことができるようになるでしょう。



### 十角館の殺人 綾辻行人 著

世の中には「これを読んでいないなんて、人生の損失だ！」と思えるような本が確実に存在しています。そしてそのうちの1冊は、間違いなくアガサ・クリスティーの『そして誰もいなくなった』でしょう。これはその推薦文に書いたことですが、クリスティーの作品の影響力はすさまじく、これまでに数々のオマージュやパスティッシュ(模倣作品)が生み出されてきました。その

中でも必読の名作と言えるのが、時代と国を超えて生み出された『十角館の殺人』です。本書は、推理小説研究会に所属する大学生たちが、合宿で集まった孤島で一人ずつ殺されていくという物語です。これだけ見ると、まさにクリスティーの作品をなぞっただけの作品に思えますが、それをどう作者の綾辻行人が「味付け」しているかが読みどころです。本書は、そのトリックに関わる部分から、長らく映像化が不可能と言われてきました。しかし、2024年にHuluで実写ドラマ化されることが発表され、再び注目を集めています。食べ物に食べ頃があるように、本にも読み頃というものがあります。この実写ドラマ化は、まさに今こそ本書を読むべきタイミングであることを象徴的に示しています。まずクリスティーの原作を読んで「本格」探偵小説を味わった後、是非綾辻行人の本作を読んで、現代の「新本格」探偵小説を堪能して欲しいと思います。なお、推薦者個人は、実は同作者による別作品『時計館の殺人』をより評価していますが、残念ながらこの本は福岡大学図書館にはありません。興味を持った方は、是非購入申請して欲しいと思います。

# 人文学部

## 小笠原 史樹先生



### 悪魔の系譜

J・B・ラッセル著；大瀧啓裕訳

アメリカの歴史学者にして宗教学者、ジェフリー・バートン・ラッセル(1934-2023)の著作。英語の原題は『暗黒の王子: 歴史上の根源的な悪と善の力(The Prince of Darkness: Radical Evil and the Power of Good in History)』で、原著の出版は1988年。J・B・ラッセルは長年、主に西欧における悪魔の概念の歴史について研究し、古代から現代に至る悪魔の概念について『悪魔』、『サタン』、『ルシフェル』、『メフィストフェレス』という四冊の研究書を発表した後、それら四冊の概略をコンパクトに示す本として、この『悪魔の系譜』を書いた。この類の本はしばしば、多くの情報を一冊で伝えようとするあまり、無味乾燥な記述で満たされてしまいがちであるが、本書にその心配は要らない。

ページをめくる度に、魅力的で印象的な物語の紹介や引用、それらの物語に関する明快で刺激的な解釈が次から次へと出てきて、とにかく面白い。当然ながら、悪魔に関連する文学作品への言及も豊富で、これから読む本を探すための「読書ガイド」としても使える。また、悪魔の物語や概念について調べることで悪の問題にアプローチしようとする、という方法論も明確であり、この明確さも、本書の読みやすさに大きく寄与しているように思われる。もちろん、決して「完璧」な本ではない。それぞれの物語の解釈がどこまで妥当なのか、色々と検討の余地はあるだろうし、悪の問題がやや単純化されすぎている、とも感じられる。その他、日本語訳に幾らか違和感を覚える箇所もあるが、それらの「問題点」によって本書の魅力が失われてしまうわけではない。悪魔という一つの「キャラクター」に注目して西欧の概念史を実際に辿ってみせることで、本書は、学術研究の圧倒的な面白さを実感させてくれる。

この本では詳しく扱われていないような、西欧以外の「悪魔」の歴史について調べたり、さらに現代日本の小説やマンガ、アニメやゲームなどに登場する「悪魔」について調べたりすることで本書の研究を補完・拡大する、という生産的な課題も与えてくれる。めくるめく「悪魔の概念史」の研究は未だ始まったばかりであり、その研究の一端を担うのは、きっと現代日本の大学生に違いない。

# 人文学部

## 古澤 義久先生



漢字文化事典  
日本漢字学会編

この本は漢字にまつわるさまざまな事柄に関して解説した事典です。形・音・義(意味)といった漢字そのものの解説に加え、漢字の調べ方、漢字の歴史、様々な漢字辞書、漢字教育などさまざまなテーマで243項目が取り扱われています。対象となる地域も中国や日本だけでなく、朝鮮半島やベトナムはもちろん、欧米圏の漢字まで扱われており、世界的な広がりがあります。事典と言えば通常、「引く」ものですが、この事典は一項目につき2頁または4頁で解説されており、「読む」ことができる事典です。漢字の持つ奥深い世界を手軽に知ることができる便利な本です。この本を紹介した私も2項目書いていますので、探してみてください。

## 畑中 佳恵先生



續明暗  
水村美苗著

夏目漱石の未完の小説『明暗』(大正5年)を、現代の女性作家である水村美苗が「完結」させた話題作である。本作について予備知識をもたず、作者の名前を隠したままページをめくれば、まずは明治・大正期らしい文章だと感じるだろう。漱石の文体への擬態はすみずみまで行き届いており、漱石が造形した津田や清子やお延ら登場人物の「あれから」が、何の断絶もなく書き継がれているかのような錯覚を起こす。実際、冒頭の「百八十八」章は『明暗』の末尾がそのまま用いられているのであり、読者は漱石の文章を入り口に、水村が「完」と書き付ける「二百八十八」章までを読み通すことになる。これは誰の作品なのだろう。作者とはいったい何なのか。小説と作者をめぐるラディカルな

問いへといざなわれた読者は、すでに文学研究の門を叩いているのかもしれない。

# 法学部

## 山下 慎一先生



### 15歳からの社会保障 横山北斗著

とても複雑で分かりにくい、社会保障や福祉のしくみを、登場人物の具体的な状況をもとにしてストーリー仕立てで教えてください。皆さんの身近な問題を解決するためのヒントがたくさんあるかもしれません。著者の横山さんは、色んな所で執筆や講演活動をされており、社会保障の重要性を多くの人に伝えたいという熱い思いをお持ちの方です。ぜひ一度、手に取ってみてください！



### 三酔人経綸問答 中江兆民著；鶴ヶ谷真一訳

私たち研究者は、自分の考える学説が正しいと思いきり、ときに極論に走ってしまいます。あるいは研究者だけでなく、学生の皆さんもそう言うところがあるかもしれません。大学院生のころは、私自身もそのような傾向がありました（もちろん、極論に走ることができるほど物事を考え抜くことは、それはそれで必要なことだと思います）。ところがたまたまこの本を読んで、色々と考え方が変わった気がします。私にとっては、自分の考え方がそれほど大きく変わることで結構な驚きでした。皆さんも、是非そのような体験をしてみたいと思います。



### 社会保障のトリセツ 山下慎一著

この本の著者は、福岡大学法学部の教員です。社会保障の専門家でありながら、実際に使おうとすると制度が複雑すぎて使い方がわからなかったという著者の個人的な経験が元になり、作られた本です。最初の部分に、それぞれの人を持っている悩みごとをたどっていけば、使えるような社会保障制度を探すことができるフローチャートが載っており、非常に工夫されています。また、イラストがメインになっているので、とても具体的なイメージが湧くと思います。皆さんの身近な困りごとを解決するためにぜひ活用してください。以上、著者本人による自画自賛書評でした。

# 法学部

## 山下 慎一先生



法学  
早川吉尚著

私としては、数ある法学入門の本でも、この本が一番読みやすく、ためになると思います。この本の最大の特徴は、実際の法律を例にとるのではなく、もっと身近なルールを例にして、法学の考え方を伝えているところです。これは私自身が本に書きたいと思っていたことで、「先を越された!」という思いが強いです。法学研究者の中には、「この本は『法学入門』ではなく『ルール入門』だ」という評価をする人もいますが、私としては、「法もルール的一种だし、別にそれでいいのでは?」と思います。皆さんも、この点についてどう思うか、本書を読んだうえで書評を書いてみてください。



満願  
米澤穂信著

この本はすごいと思います。短編集なのですが、どの短編も、1つ読んだら本を1冊分読んだ後くらいの読後感があります。人間の心情の微妙な部分をすごく丁寧に描かれていて、引き込まれ、手に汗握り、ホラーではないのにゾッとするものばかりです。私の個人的な見解としては、教科書とかを読むよりもこの本を読んだ方がいいのではないかと、思ったりもします。この筆者の書いたものは全部読んでみたくなります。



労働法はフリーランスを  
守れるか  
橋本陽子著

ウーバーイーツや芸能人のような働き方は、労働法によって保護されるのでしょうか。近時、世界的に注目されている論点です。筆者は、「労働者性」という観点から、この問題を論じています。社会に出て働くにあたって、とても参考になると思います。たとえば、サッカーに興味がある人は、J3の選手が最低賃金以下の給料しか受け取っていないことなどを念頭に置けば、より具体的なイメージを持って読めると思います。

# 経済学部

## 山崎 好裕先生



エミール  
ルソー著 今野一雄訳

18世紀のフランスの思想家ジャン=ジャック・ルソーは社会契約という考え方で知られている。人間の社会というものは自由な個人が契約によって作り出したものであって、全ての人に平等に権利が認められていなければならないということだ。近代日本でルソーは自由を求める若者から熱烈に支持された。ルソーの『社会契約論』を明治時代に『民約論』として翻訳した中江兆民は「東洋のルソー」と呼ばれている。なぜ「日本のルソー」ではなく「東洋のルソー」なのかと言え、彼が漢文で翻訳を作ったからだ。漢文であれば中国の人たちにも読める。こうして中江の翻訳は日本だけでなく東アジア諸国に自由啓蒙思想が広がるうえで大きな役割を果たした。今皆さんが学んでいる地域からも「九州のルソー」と

呼ばれる明治時代の若者が出た。自由民権運動で活躍した熊本県荒尾市の宮崎四兄弟の長男・宮崎八郎である。彼は中江にも師事したが、西郷隆盛の起こした西南の役に参加して戦死している。さて、ルソーは『社会契約論』とほぼ同時に『エミール』を出版している。このなかでルソーは、人間は自由なものとして生まれるのだが、到るところで鎖に繋がれてきたと書いている。つまり、私たちは生まれたときの自由を守っていかねばならない。社会である以上、個人が自分の欲望のままに生きることはできない。人は社会を契約によって作る時に個人の意志とは異なる社会全体の意志に従うことを約束する。これは一見自由を奪われることのようにだが、個人は自由な決断で社会に従うことを選択するのである。だから、王様や上司などの人間に従属することとは全く違う。一方、子どもが保護者である親に従うことは当然と思うかもしれない。しかし、ルソーは『エミール』で、子どもは未熟な大人でなく社会のなか

で確固とした位置を占める存在であると書いた。これはとても重要な考えだと思う。現在日本では少子化が大問題になっているが、その背景には子どもの養育に親が過度に責任を感じてしまい重荷になってしまっている事情もあるのではないだろうか。子どもの自由意志を尊重しながら、その安全と教育を大人が見守る在り方が求められているのかもしれない。

# 経済学部

## 山崎 好裕先生



諸国民の富  
アダム・スミス著  
大内兵衛、松川七郎訳

学生の皆さんに「知ってる経済学者は？」と聞くと「アダム・スミス」と答えるだろう。しかし、経済学の父と呼ばれる本人は自分を経済学者と思ったことはないはずだ。18世紀の彼が専門としたのは道德哲学という学問であった。これは万有引力で有名なニュートンが大成した自然哲学と並ぶ学問分野で、社会の成り立ちを考える、現在で言う社会科学のことである。アダム・スミスは最初道德の観点から社会の成り立ちを考えて『道德感情論』を著した。アダム・スミスが強調するのが共感の感情である。万有引力が物質同士を結び付けて宇宙の秩序を形作っているように、人間社会では他人のことをわが事のように感じる能力によって秩序ある状態が保たれる。ニュートンはアダム・スミスが最も尊敬する学者

であった。次いで、彼は社会的分業の観点から社会の成り立ちを考える。こうして有名な『諸国民の富』が書かれた。一般に古典というものは現代人が読んだらなかなか退屈なので、私が学生の皆さんに勧めることは少ない。しかし、『諸国民の富』は面白いから一度読んでみてほしい。なぜかという、到るところにアダム・スミス自身の驚きが散りばめられているからだ。彼の研究は本当に好奇心が原動力になっていると感ずることができる。さて、共感の感情は、分析の次元を異にする『諸国民の富』では交換性向というかたちで姿を現す。人は一人で生きることを好まず、人と物の交換を通じて関わりを持つことに喜びを感じる。そうして分業が生まれるのだが、分業で特定の製品の生産に特化しているうちに生産性が高まって人々は経済的に豊かになっていく。だから、アダム・スミスの経済観は普通そう思われているように競争ではなく共生である。最も世間の誤解が酷いのは『諸国民の富』に一度しか出て

こない見えざる手という言葉である。一般に、競争を通じて機能する市場の原理を意味するとされるが違う。アダム・スミスは人々が自分の仕事に専念するうちにお互いに助け合っているという不思議をこの言葉で表している。彼は最後に法律の観点から社会の成り立ちを考える本を準備していたが病で完成できないと思い、原稿を全て焼き払った上で亡くなった。

# 経済学部

## 山崎 好裕先生



### 遠野物語 山の人生 柳田国男著

鬼と人間の戦いを描いた『鬼滅の刃』は、アニメになってテレビ放送や劇場で人気を集めた。この時代背景が大正時代であることはご存知だろうか。大正時代、近代化の一方で農村や都会には未だ怪しい物の怪の類が潜む暗闇が残されていた。同じ時代、日本民俗学の創始者・柳田国男は『遠野物語』を出版した。岩手県の遠野地方に伝わる不思議な話を収録したこの本は、当時のオカルトブームとも相まって大変な反響を呼んだ。柳田は序文に「願はくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」と記した。このフレーズは怖いもの見たさでその本を開いた人をゾクゾクさせるサービスかもしれない。だが、恐らくは、都会に住む人々に伝統的な農村の心象風景を思い出してほしいという柳田の願いが込められて

いるように思う。と言っても、柳田の思いは失われていく古いものへの郷愁みたいな生易しいものではなかった。元々、柳田は農商務省の官僚として農山村を調査する仕事をしていた。見出したのは農山村に住む人々の貧しさである。いかにすれば農村を豊かにできるかが官僚・柳田の課題であった。彼は農政学の専門家として早稲田大学で教壇にも立っている。そんななかで日本人が自分自身を知るための学問として民俗学が必要だと考えた。自分たちの意識や社会を改善する方法は外国の学問をいくら学んでも見出すことはできない。自分たち自身を深く考え、自分たちが何者であるかを明らかにすることで初めてできることなのだ。柳田は『遠野物語』を執筆した4年後に貴族院議員書記官長に就任している。しかし、民俗学にかまけて職務を疎かにしているのではないかと疑った貴族院議長・徳川家達(いえさと)と折り合いが悪くなり、就任から5年後に辞任して遂に官界を去った。現在の私たちは、日本人と

は何かを考えているだろうか。それを考えないと日本社会は良くなっていかない。『遠野物語』の最初のページには「この書を外国に在る人々に呈す」という1文だけが記されている。ここで名指されているのは現代の日本に暮らす私たちのことである。一人自室で『遠野物語』を読んでほしい。ふと後ろを振り返ると、山人たちが君を見詰めているかもしれないよ。

# 経済学部

森田 薫夫先生



五カ国語共通のことわざ辞典  
張福武著

魅力的なレポートや論文のタイトル決めのために

皆さんはレポートや論文のタイトルをどのように決めているでしょうか。人間関係を築く上で第一印象が大事であるように、レポートや論文のタイトルは読み手に興味深く読んでもらうために重要であると思います。一つのテクニックとして、諺や古事成語をタイトルの文頭におくというのがあります。私自身、先日新しく書いた論文のタイトルを決めるために、ある日本の諺が英語でどのように表現されるのかを本書を参照しつつ調べました。



福岡はすごい  
牧野洋著

福岡市の「すごさ」をより深く理解するために

皆さんにとって福岡市は、福岡大学に入学したことで縁深い地域になったことと思います。そんな福岡市について、本書は主に肯定的な観点から論じています。例えば、本文中には「住みやすさがすごい」と主張する章があります。実際に人口増加率は2015年に東京都区部を上回ることで、それは大学や専門学校、第三次産業の企業集積によって若者が転入しているためだと指摘されています。一見もってもらいそうですが、注意が必要です。まず、人口が増加したために、サービス業の支店が市内に立地した可能性があります。また、人々の所得水準が人口増加率と各種学校の増加に寄与した可能性も考えられます。これらの可能性についての吟味は、福岡市の「すごさ」

をより深く理解するために取り組む、本書を読み終えた私たちの宿題と言えるのではないのでしょうか。

# 商学部

## 鈴木 裕介先生



### 自動車の社会的費用 宇沢弘文著

日本を代表する経済学者である宇沢弘文氏が1974年に出版した名著である。私たちの社会は1960年代以降の急速な自動車の普及、いわゆるモータリゼーションの進展により、様々な恩恵を受けてきた。人々の移動は容易となり、より遠くへ、より早く移動することができるようになった。またトラックを中心とした物流網が整備され、物質的な豊かさを獲得した。一方で自動車の普及は私たちの社会に様々な交通問題を引き起こした。都市の市街地では自動車交通の増大による慢性的な交通渋滞が発生している。また自動車事故は毎日のように日本のどこかで発生し、尊い命が失われている。さらに国道などの自動車の交通量の多い幹線道路の沿道では、自動車による騒音や大気汚染などが深刻化し、

人々の生活環境は悪化している。このような自動車の負の側面をいち早く指摘したのがこの書籍である。宇沢氏は自動車が急速に普及し始め、政府も高速道路などの整備を積極的に進め始めた時代の流れの中で、いち早く自動車のベネフィットだけではなく、自動車のコストに目を向けるべきだとこの書籍の中で主張している。新たな道路建設による自然環境の破壊、自動車からの排気ガスや事故による被害などを社会にもたらされるコストと捉え、自動車中心の社会の問題点を指摘している。そして私たちが生活する現代、自動車中心の社会はさらに深化し、私たちの生活はもちろん、街の形や社会のあり方も大きく変えてしまった。皆さんも生活の様々な場面で自動車を利用し、自動車は日々の生活における「当たり前」なものになっているだろう。しかし便利なものだからこそ、生活における自動車の活用の仕方をぜひ考えてほしい。街中で小さなわが子に「車に

気をつけて」と注意する親の姿、自動車を運転できない高齢者が自宅から遠いスーパーへ買い物に出かける姿、狭い歩道を車をよけながら登校する小学生の姿。自動車の利便性と引きかえに、私たちは何か大切なものを失ってしまったのではないか。ぜひ大学生の皆さんにぜひ一読してもらいたい一冊である。

# 商学部

## 新田町 尚人先生



### 道をひらく 松下幸之助著

社会人として働き始めてしばしば考えることに、「経営者はいったい何を考えているのだろうか」がある。経営者は一般労働者の考えとは異なる判断を行うことが多く、彼らは何を考えているのかを知りたくなる。「株価や株主のことしか考えていない」、「金の亡者」と思える経営者も多いが、人格者と言える経営者も少なくない。松下電器産業(現パナソニック)を創業した松下幸之助は、丁稚奉公という会社でいえば一番下の立場から働き始め、創業した会社を日本有数の大企業に育て、私たちの暮らしを向上させる製品を世に送り出してきた。松下が著した『道をひらく』では、「逆境」という試練にもまれた人は尊いと書かれており、幼い頃から病気がちで丁稚奉公からスタートした松下自身の人生を振り返っているように思える。私たちが困難に直面

した際に勇気を与えてくれる文章だ。しかし、物事がうまく進む「順境」も尊いと言っている。逆境であれ順境であれ、与えられた環境に素直に生きる、謙虚の心を忘れないことの大切さを説く。読むたびに、自分自身が素直に生きているか、謙虚の心を忘れていないかを気づかせてくれる。また、次のページには「志を立てよう。本気になって、真剣に志を立てよう」と書かれている。「志を立てるのに、老いも若きもない。そして、志あるところ、老いも若きも道は必ずひらけるのである」。大学に入ること自体が人生の目的となり、学生生活で何をどうしていけばよいのかわからない学生が多いのではないだろうか。志はすぐに立てられなくても、何か新しいことを始めてみて、面白ければ続けてみればどうだろう。いつか、志につながるかもしれない。経営者だけでなく、マネージャー層、一般の方々から愛された『道をひらく』は、1968年の出版から50年以上、発行560万部を超える人気の本である。書かれていることの多くは人としての姿勢であり、

普遍的な思想である。多くの人と共有したい思想である。人生という道に迷ったとき、その道をひらく手助けをしてくれる松下の言葉が満ち溢れた一冊である。

# 商学部

## 松永 達先生



年収は「住むところ」で決まる  
エンリコ・モレッティ著；池村千秋訳

先進国では、かつて発展していた工業都市の衰退が目立っています。いっぽうで、ITや金融など新しい産業が発展して人口が増えている都市も増えています。この本の原著のタイトルは The New Geography of Jobsで、直訳すれば『仕事の場の新しい地理学』といったところです。特にアメリカで、イノベーションが発展して生産性上昇を牽引し、雇用が拡大して富が集中する都市と、旧来の産業が衰退する都市の開きが大きくなっている現状とその要因が、具体的な事例とともにわかりやすく説明されています。この本は、日本語訳に付けられた題名のように、「都市によってなぜ年収が異なるのか」といった読み方もできますが、「これからの都市の発展のために、どういったイノベーションがなぜ重要なのか」といった読み方も

できます。また、「こうした変化とともに、知識や技能といった人的資本がいかに重要となっているか」といった点も読み取れます。こうしたプラスの効果には、相互に作用して強め合う好循環が働きます。その背景として重要なのは、人と人とのつながりです。高度な知識や技能を身につけて、一緒にアイデアを交換して共同で作業すると、可能性が広がっていきます。ネットが発達しても、創造的な仕事には、いろんな人が顔を合わせるのが大事だということです。このほか、発展する都市では、生産性の高い輸出部門の発展が引き金となって、様々な業種の仕事の場が拡大していることもわかります。衰退していた工業都市が再生した事例も紹介されています。しかし、このようなメカニズムに恵まれず、衰退が続く地域もあります。近年、欧米では、こうした地域の人々の間で不満が高まっていて、政治を変化させていますが、この背景も読み取ることができます。これはどう対処すればよいのでしょうか。自国

の中の発展地域の成長をもたらす富を、財政を通じて国内で効果的に再配分する必要性がヨーロッパではよく議論されています。この点に関心がある人は、トマ・ピケティの『自然、文化、そして不平等』(村井章子訳)などの著作や解説を読んでみてください。

# 商学部

## 河瀬宏則先生



### なぜ、会計嫌いのあいつが会社の数字に強くなった？ 村上裕太郎著

企業分析しなくては、あなたはそんな課題で困っていませんか？大学生なら就職活動で企業分析を求められるでしょう。就職希望先の企業の平均給与はいくらなのでしょう。業績が悪いと職場の雰囲気までもが悪いかもしれません。また、大学を卒業してどこかに就職したのなら、取引先企業の分析のため、株式投資のためなど、企業分析を行う必要があるでしょう。企業について調べるとき、会計情報は非常に有用です。企業価値の評価や倒産リスクの評価、企業のビジネスモデルを知ることにも有用です。身近な企業で例を挙げましょう。西日本鉄道(にしてつ)の2023年度の有価証券報告書をチェックすると、売上高の多くの割合を占めるのがバス・鉄道事業ではなく、別の事業であることがわかります。

この本は会計情報を活用するための入門書です。簿記資格の勉強もビジネスの専門用語を学ぶのに重要ですが、簿記は会計情報を作成することに特化しています。会計情報を活用して企業を分析するには、異なるトレーニングが必要です。この本は、会計学を専攻してこなかったビジネスパーソンを対象に執筆されています。会計学を学ぶ商学部の学生はもちろんですが、それだけでなく企業分析に興味はあるけれども、敬遠してしまっている方におすすめします。

# 商学部

## 篠原 巨司馬先生



### 世界は経営でできている 岩尾俊兵著

経営と聞いて大学生の皆さんはどのようなイメージを持つでしょうか。経営者になりたい人が学ぶものなのでしょうかという人や、もしくは堅苦しそうだからちょっとと敬遠する人もいるかもしれません。経営という言葉自体、かなり漠然としたイメージで世の中に広がっているように思います。この書はそんな経営が実は世界の至る所で役に立っているものだという前提で書かれた人生の指南書です。経営は企業のものだけでなく、個人個人が日々直面する日常に潜んでいる。したがって、経営を学べば一生使える思考法が身につくというのが本書の主張です。

最後に本書の目次を少し紹介します。「貧乏は経営でできている」「恋愛は経営でできている」「勉強は経営でできている」といった身近なトピック、「虚栄は経営でできている」「憤怒は経営でできている」といった感情的なトピックや、「芸術は経営でできている」「歴史は経営でできている」というような学術的なトピックも扱われています。また、サブタイトルには映画や小説やアニメなどの有名な文言をもじったものが多々登場するのも読んでいて面白いポイントです。引用元を探すという遊びもできる楽しい本です。ぜひ手にとってみてください。